

## 報恩講

親鸞しんらん聖人しょうにんの恩徳に報謝する法要で、浄土真宗において最も重要な年中行事とされる。本願寺では毎年1月9日から、親鸞聖人の祥月命日である16日まで七昼夜営まれる。一般寺院や門信徒の自宅でも勤められ、本願寺に先立って営む地域などでは引上会いんじょうえ、御取越おとりこしなどとも呼ばれる。

# 報恩講ではじまり、報恩講で終わる

荻屋 光影

「浄土真宗じゆつしゆしゆの一年は、報恩講ほうおんこうではじまり、報恩講で終わる」

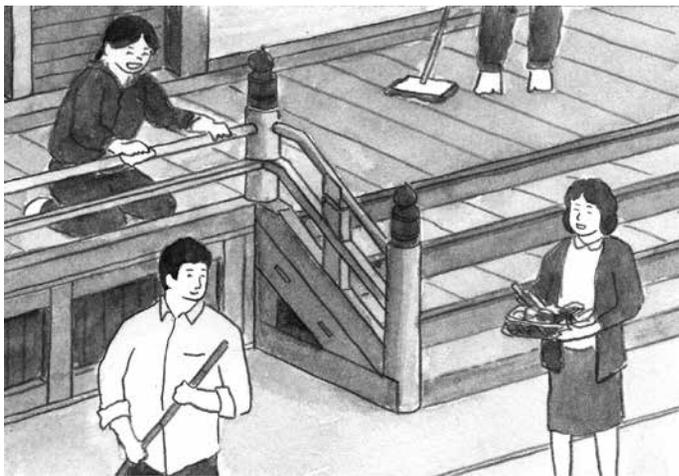
報恩講という仏事を大切にされた先人の言葉であり、また私にとっては、報恩講を何よりも楽しみにお参りくださったご門徒さんを思い出す言葉です。

毎年、お寺では報恩講が近づきますと、ご門徒さんと一緒に境内のお掃除、仏具のおみがき、当日のしおりや配布物、お斎とく（食事）の準備をします。ここ数年は食事が出せておりませんが、例年はご門徒さんが報

荻屋 光影	
報恩講ではじまり、報恩講で終わる	1
森下 広大	
福祉の仕事を通して	11
加藤 登紀子	
大切なものを伝えるため、私は歌う	21
武田 晋	
「報恩講」の意義	31

恩講のお齋のために特別に育てられた大根や里芋などの野菜を、持ち寄ってくださいいます。新米や野菜、清掃奉仕などのお手伝い、当日の参拝、すべてが報恩講のお供えであり、それぞれが身をもってできる限りのご報謝をしてくださいます。

そして、「今年も報恩講にあうことができました」と楽しみにお参りくださるご門徒の方々とともに、報恩講をお勤めします。



浄土真宗のみ教えをよろこばれた先人方が、一年の節目として、それぞれにできることを精いっぱいお供えし、お礼を申しながら大切に歩まれてきた仏事が報恩講であることを、ご門徒さんのすがたを通して教えていただきます。

浄土真宗のお寺では、最も大切な仏事として報恩講が勤められます。

報恩講は単なる行事ではなく、浄土真宗にご縁のある人にとって特別な仏事であり、一年の節目であり、またそれぞれのお寺や地域で浄土真宗のみ教えを大切に繋いでいく役割を果たしてきました。報恩講は、親鸞聖人のお徳を讃えるご法事として私たちが勤める仏事であるとともに、親鸞聖人が私に仏縁を届けるために整えてくださった仏事だといえ

ます。

もともと仏事という言葉は「仏ぼんの所作しよさの事」をいい、私を救う仏さまのはたらきを意味します。そのため仏事とは、仏さまが私を救おうとはたらいてくださり、私たちに仏縁が届けられていることです。親鸞聖人が私に仏縁を届けてくださっているのが報恩講であり、私たちは、親鸞聖人の届けてくださった仏縁に遇わせていただかなくてははいけません。

こんなお話を聞かせていただきました。

ある住職さんが、ご門徒さんのご法事に行かれた時のことです。ご法事の勤行が終わると、参列していたお孫さんから、

「どうして法事を勤めるのですか？」

と、質問されたそうです。住職さんはお孫さんにわかってもらえるよう

に、どう説明をするべきか悩みます。そして、

「今日はどなたのご法事ですか？」

「今日、皆さんをここに集めてくださったのはどなたですか？」

「こんな尊い時間を、こんなすばらしい場所を、皆さんに手を合わせると縁を整えてくださったのは、どなたでしょうか？」

と質問を返されたそうです。お孫さんはしばらく考えながら、お仏壇の横に置かれていたおばあちゃんの写真を見て、

「おばあちゃんだ。おばあちゃんが私たちをここに集めて、手を合わせ尊いご縁を整えてくれたんだ。おばあちゃんありがとう」

とお礼を言い、ご家族全員が尊い仏縁をよろこばれたそうです。

ご法事は亡き方を縁として私がお勤めしますが、先立たれた方が仏さ